

本来冷泉節といふものは、古淨瑠璃『十二段』にある『さてもやさしや冷泉』の句につけられた華やかに艶麗な節廻しを云つたもので、(冷泉とは三河の國矢矧の長者の娘淨瑠璃姫に仕へた侍女の名である)あるが、義太夫はわざとこれを愁ひの文章に使用したのである。かうした試みは、古淨瑠璃の人から見ると、破格の振舞、異端の業で、果せるかな批難の矢を浴せられたが、義太夫は自己の信



面臺舞「段の入鐘人職皇天明用」

* 念の上に試みたことだからビクともしない、歡樂の極みと哀傷の極みはわづかに薄紙一枚を隔てた差異に過ぎない、廊の女の愁ひ華やかなうちに悲しみを表はさねばならない、艶麗なうちにも何處か哀愁を帯びた『冷泉節』こそ恰好の節調であると信じたからである。これは勿論口で語るといふより心持で情を活かして語らねばならぬだけに、古來至難の節調として傳へられてゐる。されば二世竹本義太夫(政太夫)もその門下に説いて『これは愁ひの冷泉なり、常の冷泉に語れば、人形いそ／＼として嬉しさうに躍るべし、文句に氣をつけるべし』と訓へてゐるほどである。

六十四歳を一期

義太夫終焉と墓地

用明天皇職人鑑以後の十年、義太夫はひきつゞいて、竹本座に出演してゐるが、記録はその上演狂言を左の如く示してゐる。これはもとよりその重なるものであるが。

『傾城反魂香』『心中二枚繪草紙』『兼好法師物見事』『碁盤太平記』『曾我扇八景』『吉野忠信』『堀川波の鼓』『緋縮緬卯月紅葉』『同潤色』『丹波與作』『酒吞童子枕言葉』『心中萬年草』『淀鯉出世瀧徳』『五十年忌歌念佛』『梶狩劔本地』『今宮心中』『百合若大臣野守鑑』『心中及水朔日』『夕霧阿波鳴門』『冥途の飛脚』『吉野都女桶』『姫女姥』『傾城吉岡染』『長町女腹切』『天神記』『孕常磐』『大職冠』

『相摸入道千匹

犬』『娥歌留多』

(以上近松門左

衛門作)

正徳四年八月

義太夫節開拓の

大事業をあとに

して、竹本座に

於ける『娥歌留

多』を上演中に

一世の大藝術家、竹本筑後掾藤原博教は、遂に六十四歳を一期として永眠の人となつた。

貞享二年、新派義太夫節を發表して以來、

舞臺上の生活を續けること三十有餘年。その

間淨曲百三十餘番を語り、内新作狂言實に九

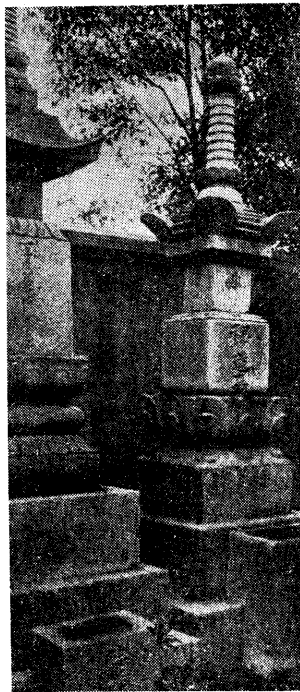
十餘番の多きに及んでゐる。

道頓堀に近い、日本橋筋一丁目(千日前法善寺東門東へ突當り)に居を定め、而かもそれが竹田出雲の宅と隣り合はせてあつたが、晩年は自分だけ別に、日本橋三丁目に住んでゐた。臨終の地は即ちこゝである。

墳墓は、菩提寺に當る天王寺の南、土塔山超願寺に現存してゐる。但し、墓石は最初の物ではなく、文化十年その末葉竹本喜義太夫なる人が、百年忌追福の擧のあつた前後に建てたものらしい。さうして、碑面に刻まれた竹本の定紋が、どうしたことか竹田出雲の紋になつてゐる。(義太夫は鞠ばさみの中に九枚笹、出雲は竹の中に九枚笹)その他には、天王寺西門、納骨堂の裏に、寶篋印式の古雅な、筑後掾墓塔がある。これは高弟であり富裕者であつた豊竹若太夫が一個建立になる、師恩追慕の紀念塔である。



超願寺竹本義太夫の墓



天王寺竹本義太夫の墓

門葉また多士濟々で、竹本派二世の棟梁、竹本政太夫、豊竹派の始祖若太夫を始め、老巧の陸奥茂太夫、美音の竹本頼母、内匠理太夫、竹本和太夫、竹本難波、竹本文太夫、竹本幾代太夫、竹本萬太夫。多川源太夫長嶋重太夫。二つ井彦太夫。その他。枚擧に遑がないが、寶永七年一月に作製された門下連盟狀の人員を數へると、總頁七十八名に上つてゐる。

送葬の當日には、白無垢姿に跣足の門弟、老若擧つて五十四

人首うなだれて

棺側に添ふた。

生家は既に述

べた天王寺村南

堀越であるが、

その後竹本座の